

林産試験場川西場長 交流会でのご挨拶（抜粋）



まずもって、（一社）林産技術普及協会が70周年の節目を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。そして、私ども道総研林産試験場も令和2年（2020年）に創立70周年を迎えておりますので、創立以来ほぼほぼ全期間に渡って、私ども林産試験場の運営、研究の推進、そして研究成果の普及にあたり、並々ならぬご理解とご協力、ご支援をいただいたこと、衷心より深く深く感謝申し上げる次第です。

さて、70年という期間をざっと振り返ってみますと、70年前の1950年代は、戦後復興のさなか、木材の需要が高まり、木材の価格も高く、地域には多くの製材工場があつて、多くの雇用があり、まさに地域の主要産業であったかと思えます。また、山では拡大造林花盛りで、カラマツ、トドマツをどんどん植えていきました。造林のピークは1969年で、年間7万2千haという驚異的なスピードで植えていったことになり（ちなみに近年は年間8千haくらいのペースで再造林が行われています）。しかし、その後、木材の輸入自由化により、安い外材が入ってきて、木材価格の長期低迷の時代になり、国内・道内の林業・林産業は厳しい状況になり、地域の製材工場等も減っていきました。山の方でも自然保護運動の高まり等により、天然林を伐らなくなりました。輸入材も熱帯雨林からの丸太輸入は激減し、代わって、北米のSPF、欧州のWW集成材などが道内で使われる建築材としてメジャーになってきました。

そうした時代の変化に応じて、林産試験場の体制や研究内容も変わってきているわけですが、当時を振り返った記事を読みますと、「拡大造林によって生ずる小径広葉樹の有効利用が緊急課題で、繊維板や木材の糖化の研究に重点が置かれた」とあります。その後は、製材、乾燥、合板の製造技術などの研究が徐々に充実していきました。やがて、木材需要が減少するに至り、需要の拡大が大きな課題になっていき、カラマツ間伐材を活用した農業用畜舎、木質セメントボードや木製サッシ、湾曲集成材の開発などが行われました。さらには、カラマツを無垢の建築材として使うべく、コアドライの開発を行いました。

その後、人工林が育成期から利用期、間伐から主伐にシフトする中で、さらに時代は大きく変化し、化石燃料からの脱却、SDGsが重要視され、木質バイオマスの利用が拡大したほか、近年はウッドショックなど、業界を巡る情勢は混沌としています。中高層木造建築が徐々に普及しつつありますし、輸入材から国産材・道産材の利用への流れが強くなりつつあります。そうした中で、林産試験場では、木質ペレット製造技術の改善、トドマツ、カラマツCLTや大径材を活用した高強度集成材の開発などを進めてきました。これらの研究のほかにも、木材の防腐や防火性能の向上、VOCなどへの対策、木製エクステリアの開発、CNC木工旋盤の開発、木材・木質燃料のLCAに関する研究、新たなキノコの品種開発などなど、様々な試験研究に取り組んできました。これらの研究は、林産技術普及協会および会員企業の皆様、道をはじめとする行政や関係団体等の協力なしには進められなかったものであり、重ねて感謝申し上げます。

本日は、記念の講演として、広葉樹に関する課題をいただき、3名の研究員から発表をさせていただきました。このような機会を設けていただいたことに御礼申し上げます。

私は、林産試験場勤務となる以前は、道有林を管理する森林室におりましたので、広葉樹の山を沢山見てまいりましたが、広葉樹の山の取り扱い（森林施業）というのはかなり難しいという印象を持っております。針葉樹であれば、苗木を植えて、育てて、伐って使ってという循環利用を進めやすいのですが、広葉樹はシラカバなど一部の樹種を除き、苗木を植えてもなかなかうまく育てることができません。ただし、いつの間にか自然と、あるいはかき起こしという施業により天然更新したりします。本日の講演内容では、トドマツ人工林内で生育していた広葉樹を積極的に活用する話がありましたが、それらは植えたものではなく、期せずして天然更

新してきたものです。つまりは、人工造林としては、失敗造林であったとも言える場所ということになります。しかし、それが自然の摂理です。自然が人間の植えた苗木を拒否して、いろいろな樹種の広葉樹を生やしたわけです。

ちょっと個人的な考えが入ってしまいますが、針葉樹は植えて、伐ってという世界です。しかし、広葉樹はそのような単純なものではなく、自然の摂理をいかにうまくコントロールして利用していくかにかかっていると思っています。それは容易ではありませんが、針葉樹オンリーではなくて多様な樹種を含む広葉樹を育成し、持続的に利用していくというのは一つの林業のスタイルなり得る可能性がありますし、このことは昨今、世界的に重要視されている生物多様性の確保、そして近年はビジネスや投資の世界でも必須の視点となっている生態系の回復（ネイチャーポジティブ）にも貢献する、そういう視点で広葉樹の育成・利用を推進していくも一つの方法とされているところです。

いずれにしましても、林産試験場としては、これまでの70年を振り返りつつ、次の10年、20年、そして100周年に向けて、時代にニーズに応じ、又は時代を先読みして、試験研究を進め、皆様方と共に北海道の林産業の発展に貢献してまいりたいと考えておりますので、引き続き、皆様のご理解とご協力をたまわりますようお願いし、お礼の挨拶といたします。